

長崎大と長崎総合科学大

伊王島周辺
試験海域に

移動容易、環境穏やか

長崎大と長崎総合科学大は、長崎市の伊王島周辺海域を海中ロボットと潮流発電装置の試験海域にする構想で調査を開始した。五島列島周辺海域の海洋エネルギー発電向け「実証フィールド」で本格試験する前に利用できる「プレ実証フィールド」と位置付けている。

海中ロボット、潮流発電

交流人口拡大と島の活性化も目的。島おこし団体のNPO法人長崎アイランズアクト3と連携し、漁協や行政の協力を得ながら数年後の試験海域化を目指す。

長崎大は、海中の環境や機器を遠隔操作で確認できるテレビカメラロボットや潮流発電装置などの開発を進めており、主に試験水槽で試運転している。実用化には実海域での試験が不可欠だが、五島列島周辺の実証フィールドは波や潮流の環境が過酷で、市本土からの移動も負担となる。

そこで市本土と橋でつながり、海的环境も比較的穏やかな伊王島に着目。水槽から実証フィールドへ移行する前の試験海域とする。

両大は3月に海洋エネ分野で連携協定を結んでおり、その具体策の一つ。今月4、5両日には、学生らが三つの候補地で海中ロボットを動かす、小型無人機(ドローン)で様子を撮影するなど実際の作業を想定して合同調査した。今後、潮流や海底の状況も調べたいという。

長崎大大学院工学研究科の山本郁夫教授は「海中ロボの整備場や海底ケーブルなどのインフラ整備、海中ロボの全国大会もできたら」、長崎総合科学大船舶工学コースの松岡和彦准教授は「潮流発電で得た電気を島の魚の養殖施設に活用すれば、ブランド化にもなるのでは」と将来展望を話している。(田賀農謙龍)



海中ロボやドローンを使って合同調査する長崎大と長崎総合科学大の学生や関係者
 長崎市伊王島町